晩翠通りから原町本通りへ
～詩人・土井晩翠を偲んで

宮城野区文化センター
村上　佳子

仙台市中心部を南北に走る「晩翠通り」はかつて「細横丁」と呼ばれ、北五番丁から大町まで奥州街道に並走する道路として古くから人々の往来がありました。当時は周りより低い窪地で雨が降るとぬかるんでしまうため、仙台市は市内最初の下水道をこの通りに設置することを決め、1900（明治33）年、細横丁を通り片平丁小学校の近くで広瀬川に排水する全長2100ｍの下水道を完成させています。その後、1945（昭和20）年の仙台空襲で周囲は焦土と化し、戦後の復興により新たに幅員36ｍの道路が整備されました。整備後も名称は細横丁でしたが、1982（昭和57）年、仙台市は愛称を「晩翠通り」と決定します。公募を経て選ばれたこの愛称は、仙台の詩人・土井晩翠（どい ばんすい）の住居がこの界隈にあったことに由来しています。

今回はこの土井晩翠をご紹介したいと思います。

「荒城の月」や数々の校歌の作詞で知られる晩翠は、本名を土井林吉（つちいりんきち）といい、1871（明治４）年、現在の青葉区木町通に代々続いていた質屋の長男として生まれました。学問好きの父から「四書五経」の素読を受け、「南総里見八犬伝」を愛読するなど、中国や西洋の書物にも親しんで成長します。このように読書好きで勉強好きだった林吉ですが、厳格な祖父は「商家を継ぐ嫡男には学問は無用である。中学などにやってはならない」と婿養子の父に申し渡していました。丁稚たちにまじって質屋の修行を続ける４年ほどの間も、林吉は独学で英語の習得に努めるなど、向学心を絶やすことはありませんでした。

転機となったのは1986（明治19）年、仙台出身の英語学者・齋藤秀三郎の「仙台英学校」の開学です。15歳になった林吉は通学を懇願、さすがの祖父も仕事に励みながらも勉学を続けてきた姿を認め、進学を許可することになりました。学問の道に進むことを許された林吉は、旧制第二高等中学校、東京帝国大学へと進み、英文学者、そして詩人・晩翠への道を歩んでいきます。「晩翠」は学生時代から用いたペンネームで、その意味は「冬枯れの季節になってもなお緑を保っている」とのことで、漢詩からの引用とされています。東京帝国大学在学中から次々と詩を発表していた晩翠は、1899（明治32）年に第一詩集『天地有情』を出版します。中国の「三国志」の英雄・諸葛孔明をよんだ「星落秋風五丈原（ほしおつしゅうふうごじょうげん）」のように漢語を多く使った力強い作風が評判となりました。そして、この東京時代に晩翠は「荒城の月」の作詞を手がけることになります。東京音楽学校が刊行を進めていた中学唱歌集の中の１作の作詞を依頼されたのです。

春高楼の花の宴／めぐる盃かげさして／千代の松が枝わけいでし／むかしの光いまいずこ…

この詩に、音楽学校の学生だった滝廉太郎の曲が公募で選ばれ、今も歌い継が

れる日本の名曲が誕生しました。

このころ晩翠は後輩の妹・林八枝（はやし やえ）と結婚、1900（明治33）年には二高教授の職を得て仙台に戻り、以後、ヨーロッパ留学の3年ほどを除き、その生涯を仙台で過ごします。ズーズー弁英語の晩翠先生と親しまれ、優秀な子どもたちにも恵まれて幸せな一家でしたが、晩翠が61歳の時に長女が、翌年には長男が、69歳の時には次女も病で死去してしまいます。さらに戦時下の仙台空襲で住居と蔵書のすべてを焼失し、仮住まいを続ける中で愛妻・八枝にも先立たれてしまいます。失意の晩翠に、教え子や市民有志によって旧宅跡地に新たな住居「晩翠草堂」が建てられ、晩翠はここで晩年を過ごし、1952（昭和27）年、満80歳の生涯を終えました。

現在も「晩翠草堂」は青葉区大町にあり仙台市の記念施設として一般に公開され、「晩翠草堂前」のバス停としてもその名を残しています。

青葉通りに面する晩翠草堂

私が現在勤務する宮城野区文化センター近くの「原町本通り」にも晩翠ゆかりの場所があります。この通りは、国道45号線と並行して東西に走る仙台と塩竈を結ぶ旧街道で、約1.3kmの商店街です。商店は少なくなってしまいましたが、米穀店や薪炭店など明治期の建物で修復をほどこされた古民家があり、現在も代々のご家族がお住まいです。その中の1軒が「庄司家」で、土井家に婿入りした晩翠の父・林七の実家です。土井家と同じ質屋を営む庄司家の6男として生まれ、厳格な養父のもとでも息子に学問の素養を施すことができた明治の教養人は、まさに詩人・晩翠の産みの親でありました。

原町本通りの庄司家

庄司家から少し東に進んだビルの一角に2年ほど前に開店した洋食店があります。仙台の一番町にある老舗ハンバーガー屋さんの流れをくむお店で、ハンバーグはもちろんステーキやミートソースも納得の美味しさで、ハンバーガーをテイクアウトするのも身近な楽しみになっています。